



こんにちは！「集落の話の聴き手」です

町に出ると、「だより」読んでるよ、とお声掛けされることも多く、その度にうれしい集落の話の聴き手一同です。3年目になるこの事業では、これまで同様、月に1度の「集落の話の聴き手だより」を発行します。地域での思い出や暮らしぶりについて、公民館でお聴きして回る予定です。

昨年度も発行していた、「集落の話の聴き手だより」。今まで知らなかった集落のことを知れてうれしい！など多くの反響、ありがとうございます。今年度はさらに紙面を大きくし、より多くの情報をみなさんにお届けします。引き続き、お力添えをよろしくお願いいたします。

土蔵のあるまち並みに人々の暮らしが息づく 八郡

八千穂高原へ続く国道299号から、脇道へ。そこに、山間の集落「八郡（やこおり）」があります。ゆるやかな坂道に沿って、昔ながらの土蔵を持つ家屋が残っており、脈々と続く人々の暮らしを感じることができます。

今回は、八郡区と八郡の老人会が主催する「お楽しみ会サロン」（以降、八郡サロン）にお邪魔しました。会場の八郡公民館の隣には、古文書が保管された倉庫。そして、ここが分校であったことを思い出させる、グラウンドや二宮金次郎の像も残っています。その佇まいから、この場所そのものが集落の歴史を物語る、重要な場所のようにも思えます。

八郡サロンは、町の介護予防拠点事業の一環として、前年度までの区長さんと老人会で発足しました。「みんなで集まってわいわいやるのもいいんじゃないかって、始めたんだ。」

朗らかに話す会長さん。今年の4月に前区長さんは交代となりましたが、活動は継続することになりました。

「役員の中で、やりたいっていう人がいたからさ。」と、今度は新しい区長さん。やりたい人の気持ちを尊重し、今に続いているのだそうです。みんなが協力し合う集落の様子が、伝わってきます。

今年度はじめて開催されるサロンにもかかわらず、開始時間が近づくと続々と人がやって来て、あっという間に10人以上も集まりました。私たちは今回はじめて参加させていただきましたが、みなさんにこやかに迎え入れて下さいます。



サロンにご参加のみなさん。70～80代の方が中心です



「長老たちは、お寺で花見をしているんだ。昔の話（を聞きたい）なら、そっちで話すのでもいいぞ。」と、お誘いの言葉まで。地域の仲間で集まって、お茶を飲んだりおしゃべりするのが、みなさんお好きなようです。「音頭とる衆（しょう）は大変だけど、わりあい集まるいね。」

そんな明るく集まり好きな八郡の方々に、集落での暮らしを伺いました！

毎晩仲間たちと練習をした“大縄跳び”

村民運動会の思い出

みなさん共通して印象に残っていたのは、佐久穂町に合併する直前まで行われていた八千穂村の村民運動会です。八千穂村誌によると、第1回の開催は、昭和37（1962）年。分館ごとに競い合う、一大イベントだったそうです。多い時には19分館が参加し、恒例の対抗リレーでは応援の歓声が校庭いっぱいに広がりました。優勝に向け、それぞれの分館で練習が行われたエピソードからも、運動会に対する盛り上がりが見えます。

「練習も、ここで毎晩したよ。（大）縄跳びとか。10人だけ入ってやるんだけど、難しくって。俺が掛け声かけて、回したよ。」

「賑やかにやっていたよ。八郡が優勝したこともあってね。その時は、この公民館で盛大にお祝いした。」

と、男性陣。地区の体育部という役員で中心になって取り組んだ際の話も、懐かしそうにお話してくれました。「ムカデ競争もしたよね。みんなで並んでくっついてね、えっさほいさって。足が揃わないと転んじゃうから、息をあわせて。」

と、こちらは女性陣。みなさんが熱心に取り組むからこそ、時には厳しい言葉が飛び交うこともあったと、笑いながら話してくれました。「でも、練習中に何か言われても、い（え）らいなんとも思わずにみんなやったよね、不思議と。」「そう！苦にならなかった。」

みんなが先生役！

やってみたい、を形にする若妻会

サロンにお集りの女性たちが八郡にお嫁に来た頃は、「若妻会」という婦人会の活動が盛んでした。様々な活動の中でも、まず話題になったのは手芸の活動。公民館のコタツの上掛けやカーテン、人形、セーター...さらに、クラフト用の紐でかごも作ったりと話してくれました。どうやって、こんなにも多岐に渡る作品を手掛けることができるのでしょうか。話を聴いていけば、なんと、外部講師に教えてもらうのではなく、仲間同士で先生となって教え合っているのだそうです。これが若妻会の特徴だと、教えてくださいました。

メンバー同士で、得意なことや作れるものを持ち寄り、その人が先生となって、みんなで楽しむ。そんな活動を続けていたら、たくさんの作品が出来上がったのだとか。もっと作れるものはないだろうか、と日々の生活の中でも次の作品の参考になるものを探すほど、みなさん熱心に取り組んでいるようです。やりたい！と声を上げたものを、一緒に楽しめる仲間がいるなんて、とても素敵ですね。「みんな仲がいいんだよ。助け合っているよ。」「私たちの年代はうんとつながっていて、みんな（行事に）参加したんだよ。」



今でも大切に保管されていた若妻会で作った作品

当時は、八郡地区単位でのお祭りも多く、若妻会では踊りや仮装で参加しました。また、年に1回の温泉旅行もありました。夜にある若妻会の集まりに出かける際に、お義父さんが「いっておいで。」と送り出してくれ、子守もしてくれた、という思い出話も。お嫁に来た女性たちがつながりやすいようにサポートしてくれる家庭の雰囲気が、とても温かいですね。

みんなが真剣に練習に向き合い、楽しみながらも切磋琢磨して、同じ目標に向かっていたようです。それぞれの人柄が分かっているからこそ、信頼関係なのでしょう。みなさんの家族のような絆が垣間見える、とても素敵なエピソードでした。



若妻会の七福神の仮装（八郡地区の夏祭り）

また、女性の集まりとして昔から続く「お十九夜さん」。聴き手の活動をする中で、何度か話題にあがったことのある行事ですが、八郡でもまだ行われているそうです。安産の祈願を目的としているため、女性によって執り行われるものですが、八郡では3月19日前後の土日に行います。

「若い嫁さんたちは子どもを連れてきてさ、嫁さんいない衆は、おばやんたちがくるの。1軒に1人（は出す）って決まっているから。」「昔はお念仏をあげて、鐘をたたいてね。（今は）お念仏のテープもあるんだけど、私らの代はもう、唱えることができないね。」

時代と共に変化があるようですが、年齢に関わらず集まるこの行事もまた、女性同士のつながりを強くするもののようにでした。



若妻会やお十九夜さんについての様子を教えてくださいましたみなさん

暮らしの中に根付く、家族や地域の人たちとの関係性。みなさんのお互いを思い合う心に、お話を聴くだけで温かい気持ちになりました。八郡サロンの皆さん、ありがとうございました！

文章：川嶋 愛香 写真：川嶋 愛香・大波多 志保
編集：櫻井 麻美



やなぎちょう

柳町と人の暮らし

国道141号を旧八千穂村から走り、下畑区の境まで来ると、左斜めに入る細い道がある。旧佐久甲州街道である。高野町と書かれた表示板を過ぎた所から柳町集落が始まる。

伴野勝治（かつじ）さんは、20歳の頃から薬草を扱う仕事をしていた。父親は戦死、すぐ下の弟が薬草を扱う仕事を始め、その手伝いをした。「ゲンノショウコ、オオバコ、キハダ等の薬草は南北佐久地域の小・中学校を回って集めた。夏休みに小学生・中学生が集めたゲンノショウコやオオバコを買い取った。そのお金で、図書や運動用具を買ったそうです。平成の終わりまで続き、最後まで集めてくれた小学校は北相木小学校と切原小学校です。その集めた薬草は工場で乾燥させ、細かく刻んでから長野市に出荷。そこから東京や関西に送った。」勝治さんは、この仕事を25年間続けた。

「俺が子どもの頃は、近所にはたくさん子どもがいた。1軒に2、3人はいたな。多い時には30人の上はいた。遊びは、生住院（しょうおういん）でかくれんぼ、雨が降れば、俺の家の門の軒下で、ビー玉、パッチンをした。女衆はお手玉なんかしてた。俺が小学1年生か2年生の頃、騎馬戦が流行って、高野町と上区の連中が授業の始まる前に校庭で騎馬戦をやった。俺はちいせいで、高学年の荷物持ちで、先輩が騎馬を作って学校まで歩いていく後ろをついて行った。高野町中の子どもたちがいくつも騎馬を作って、学校まで歩く姿は頼もしかった。勝ったり負けたりして見ていて面白かった。」

柳町集落に入っすぐの右側に一部瓦が落ちかけた木造2階建ての家があったので、どんな商売をしていた家ですかと、尋ねると、「あれは、薬草の集荷場だ。この辺りでは俺の家ぐらいだ薬草を扱ってたのは。その集荷場以外に、大きな工場が2つあった。1つは中国から薬草を輸入して、そこで刻んで娑婆（しゃば）に出した。」

柳町は小作農家が多かったそう。この集落を歩いて気付いたことは、狭い路地が多いことだ。家と家の間の路地は、農地に通じていた。現在は農地だったところに家が立ち並んでいる。

「じい様が古物商をやっていたので、小金があったと思うが、家にはラジオがあった。どの家にもなかったのが、終戦の玉音放送は近所の人たちとラジオで聞いた。テレビもそう。家（うち）が一番早く買った。夕方になると、子ども番組が始まるので、家の縁側には近所の子どもたちが黒山のように集まって、じっと見てた。」テレビがまだ普及してない時代のどこでも見られた光景である。

※パッチン…メンコのこと



高見澤昭市（しょういち）さんには事前にお話を伺うことになっていた。訪問すると、すでに話す内容をノートに書き留めてあった。ノートを見ながら話し始めた。昭和25（1950）年に60軒くらいの家があったが、今は90軒に増えた。増えた理由は町では柳町が一番住みやすいからだという。「子どもの頃は、この通りにはいろいろな店があった。ろくろ屋（木を加工してお皿やお碗を作る店）、ピーナツ屋、お菓子屋、酒屋（飲み屋はないから大人たちは店でコップ酒を飲んでた）、下駄屋、木賃宿屋（行商人や旅芸人が泊まる）が2軒、それから季節が変わるごとに鯉の稚魚、だるま、かご等を売り歩く人もいたな。なんせ賑やかだった。懐かしいのは、お菓子屋で栗まんじゅうを作り終わると、外で待ってる私らにまんじゅうをくれる。ピーナツ屋でも、炒り終わると、ゴザの上で待っている俺たちに投げてくれる。」当時のおおらかで、どこかのどかな風景が浮かんでくる。ノートを指で追いながら、面白い話を聞かせてくれた。「この辺りには池が15あった。鯉を飼う池だ。おらの家にも池があった。“もうけ”池と呼んでた。水田でも鯉を飼ってた。大雨が降ると水田の水があふれ、鯉が逃げ出す。その逃げ出した鯉が家（うち）の池に入り込む。入ると逃げられない。だから“もうけ”池。」、昭市さんは面白そうに話してくれた。「十日夜（とうかんや）になるとわら鉄砲を作って、翠町（みどりちょう）の子どもたちと地面をたたきながら、通りを挟んで言い合った。『翠のやろめら、けんかしろ』、『柳のやろめら、けんかしろ。』実際、喧嘩するわけじゃねえんだけんどな。」



高見澤昭市さん 自慢の松の木の傍に立つ

「どこの家もそうだったが、家族が多かった。家（うち）も多い時には10人いた。冬は縄縄え（なわなえ）や山に薪取りに行ったな、『明るいうちは家の中に入っちゃいけねえ』、と言われた。厳しかった。今考えるとその当時の生活が“生きる力”を育ててくれたと思う。」「戦争中は小学生だったけど、毎日勤労奉仕ばかりで、勉強はしなかった。校庭を畑にしたり、山を開墾して大豆や芋を作った。」、話が尽きることがなかった。

今は、マレットゴルフをやっている。23年間やっているそう。92歳になっても毎日畑で野菜作りをする。娘、孫、兄弟、親戚など40人くらいに野菜を送っている。書くことが好きで、子供の頃の思い出や思いついたことを大学ノートに書いてきた。その大学ノートが3冊になった。これからも昔の思い出は残しておきたいという。

松澤透（とおる）さんは、昭和36（1961）年に当時の国鉄に入社。中込機関区に配属され、小海線に走っていた蒸気機関車（SL）のかま焚きから、鉄道マン人生が始まった。「見習い期間中は、教導さんと呼ばれる指導員から手取り足取り教えてもらいました。実際、かま焚きをやってみると、失敗ばかりでした。忘れられないのは、かま焚きで使うスコップをボイラー室に吸い込まれたことです。うっかりスコップの柄を放してしまった。一人前になるには3、4年かかると言われてました。7年間のかま焚き人生で得たことは、『SLは生き物』だということです。その日、その日でSLの調子が良い時もあれば、悪い時もある。その調子に合わせてかま焚きをするんです。これがなかなか難しい。」

当時の羽黒下には20人近く職員がいたという。「昭和40（1965）年頃に大日向にあった鉾山からでる珪砂（けいさ）の運搬が大型トラックで1日10台くらい羽黒下駅に運ばれてきた。最盛期だったこともあるが、駅には、駅長、助役、出改札係、小荷物扱い係、列車の入れ替え係など24時間勤務だったので大勢いました。」



松澤透さん（右側）ロケ現場にて



羽黒下駅に停車中の蒸気機関車

小海線にはSLが4両走ってました。野辺山は高原野菜を作ってたので、夏は畑の中に臨時駅を作って、そこから野菜を積み込んでました。野辺山には思い出があります。昭和41（1966）年に制作された石原裕次郎主演の映画『逃亡列車』のロケが野辺山駅から先の西川橋鉄橋を過ぎたところで撮影があったんです。物語の舞台は、戦争末期の満州国で、そこに小海線から引き込む線路を作って撮影してました。小海駅や中込駅でも撮影してました。

小海線に走っているSLは高原野菜を運ぶのに忙しくて、SLをわざわざ飯山機関区から借りて持ってきました。そのSLを動かすかま焚きをやったんです。これが写真です。」と言って、その写真を見せてくれて、松澤さんは若い頃から、写真が趣味で、特に蒸気機関車の写真を撮りに全国を回ったそう。

松澤さんが子どもの頃は、よく家の手伝いもしたそう。桑取りや、家畜のえさ集めをしてからでないと遊べなかった。「手伝いを終わってから山に行ってチャンバラごっこ、中寺（生住院）で遊び、どんど焼きの頃になると、山に入って、必要以上の木を切り、余った木を薪にして、お店に売ってお金に換え、文房具を買いました。今思うと、よくそんなことが出来たな、と思います。栄小学校の校庭に土俵があって、よく相撲をしました。肌と肌が直接触れ合うことで、力加減がわかり、どこまでやったら危ないか、肌で感じる事ができたと思います。スキンシップは大事だと今でも思ってます。」



（文責 西村寛）



こぼれ話やその他記事を公式noteにて公開中！

佐久穂 集落 note



発行・問合せ | 佐久穂町役場 総合政策課 政策推進係
TEL.0267-86-2553 〒384-0697 長野県南佐久郡佐久穂町大字高野町569番地

